

第1回川内高校国際交流プログラム旅行記

8月2日(金)(1日目)

様々な研修会や選考会を経て選ばれた、第1回川内高校国際交流プログラム参加者の6名は2名の引率の元、川内駅を早朝6時21分に新幹線で福岡空港へ向かって出発した。少し心配そうなお母さん達に比べ、生徒達はこれから体験するイギリスでの生活に胸を膨らませているようだった。150年以上も前に羽島から旅立った19名の薩摩藩留学生の時とは比べようもないくらい、綿密に計画されたイギリスへの旅立ちだった。



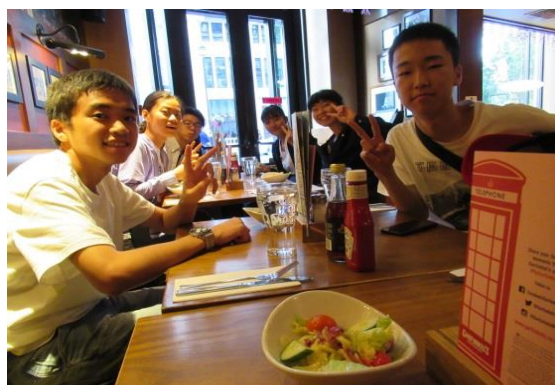
長旅を終えてヒースロー空港に降り立った我々を待っていてくれたのは、JTBから派遣されたガイドの坂元さんという女性だった。長旅の劳いの言葉を受けながら、イギリス最初の夕食を取るためにレストランへ案内された。最初ということもあり皆少し緊張の面持ちであった。



(令和元年8月2日～8日実施)



福岡空港から、大韓航空788便に乗り、仁川空港経由で一路ロンドンへ向かった。十数時間に及ぶ飛行機の旅は窮屈だったが、生徒達は数回出された韓国の機内食や「辛ラーメン」のサービスなどを楽しんでいるようだった。エアポケットで急降下した際、空中に舞った隣の女性のワインを浴びた影浦先生は少しかわいそうだった。



観光客のイギリスの食事に関する評判は、以前はあまり良くなかったが、最近ではそうでもない。特にロンドンおいしいところが増えているらしい。しかしイギリスと言ったらやっぱりこれ、「フィッシュアンドチップス」だろう。量はかなり多かったが、記念すべき最初の食事をおいしくいただいた。

8月3日(土)(2日目)

ロンドンでの滞在先 Royal National Hotel のすぐ近くにロンドン大学があった。ここは伊藤博文や薩摩藩留学生達が聴講生として学んだところであり、五代友厚や森有礼、長沢鼎など歴史上の偉人達がこの地で学んでいたことを考えると感慨深かった。また、夏目漱石が留学していた大学でもあり、すぐ近くに下宿先だった場所もあるという。漱石はイギリス滞在中コンプレックスに悩んでいたというが、川高生達は、薩摩藩留学生の記念碑の前で撮った写真からもわかるように、ロンドンっ子に負けないくらい皆明るく、元気だった。

ロンドン研修第1日目は、午前中ロンドン大学や大英博物館など市内見学をした後、ホームステイのためロンドン校外のモーデンという街に移動する予定だった。あいにく当日は、大規模な自転車レース開催のため、市内の各所を通行止めにするため、交通渋滞が予想されるとのことだった。



第1日目の研修の柱は大英博物館である。

この博物館は、18世紀には開館された世界的な博物館で、世界中から集めた貴重な文化的な展示品は800万点以上にのぼるという。ロゼッタストーン（生徒達は実際にレプリカを触った）を始め、収蔵品は美術品や書籍のほかに、考古学的な遺物・標本・硬貨やオルゴールなどの工芸品、世界各地の民族誌資料など多岐にわたる。とても一日では見て回れない数である。

この日のガイドは、JTBから派遣された田中さん（写真左）であった。この方の知識とパワーには生徒達は始終驚かされることになる。博物館では各展示物の前で質問の嵐であった。この時ばかりは昔世界史を選択していて良かったと感じた。生徒達もいろいろな断片的な知識が、説明を受けてつながり、「へーっ、そうかー」などの反応が何度も繰り返された。



今回のロンドンでの移動では、貸切のマイクロバスを利用したが、ベンツ社製で乗り心地が良く小回りのきく車で助かった。1週間を共にした運転手の方も気さくで、なまりのある英語でよく話しかけてくれた。市街地は石畳の所や結構狭い道路も多く、運転は東京以上に大変そうに見えた。



5日朝、ホームステイから帰ってくる生徒の顔を見るたびにほっとした。皆にこやかに、そしてホストファミリーと別れを惜しむ姿が見られた。話を聞くと、充実した二日間だったらしい。一緒に買い物に出かけたり、一人で近所を散歩したりと、イギリスの日常を経験したようだ。別れ際にあるホストマザーの言った「ラブリーチルドレン」という言葉が耳に残った。さすが川内高校から選ばれた生徒達である。英語だけでなくコミュニケーション能力も抜群の生徒達だと再認識した。

昼食を取って移動したのがテムズ川河畔のタワーブリッジである。この橋を歌で有名なロンドン橋だと思っている人が多いが、本当の London Bridge はすごく地味でもっと上流になる。すぐ隣には世界遺産ロンドン塔がある。宮殿や要塞として、あるいは処刑場としても有名で、もっとも観光客やスリが多い場所だ。皆、鞆をしっかりと胸に抱えながら見学して回った。



8月4日(日)・5日(月) (3日目・4日目)

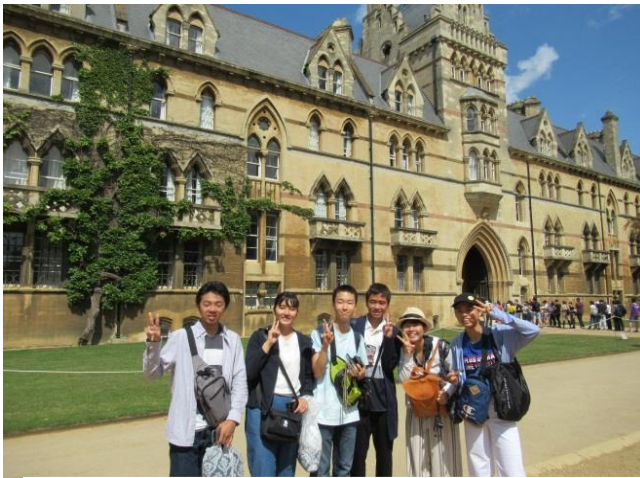
今回のプログラムの大イベントであるホームステイは3日(土)夕方から5日(月)の朝まで計画された。ロンドン校外の町モーデンのスーパーの駐車場でバスから降りホストファミリーを待つ生徒の顔は皆不安そうに見えた。グループを離れ一人もしくは二人で初対面のイギリス人家庭に滞在するわけだから、当然である。いずれの家庭も30代から50代のお母さん方が迎えに来られた。送り出す我々も不安だった。



8月5日(月)(4日目)



オックスフォードの街は、11世紀末に大学の礎が築かれて以来、大学を中心に発展してきた。文化の中心地でもあり、同時に人気の観光地でもある。不思議の国のアリスの著者ルイス・キャロルゆかりの地でもあり、映画「ハリーポッター」など数々の映画やドラマのロケ地があるこの町には、500年以上前の建築物が多く残っている。訪れたこの日も世界各国からの多くの観光客の姿を見かけた。



クライストチャーチ(上)は、オックスフォード大学の一部であり、『ハリー・ポッター』シリーズでは大広間、組み分け帽子に入る階段など、多くのシーンで使われた。お昼は実際に食堂として学生が利用しており一般の観光客は入ることができない。観光客に開放される時間を待ち、生徒達は他の観光客と一列に並んで順路を巡った。右の写真は午後の開放時間だが、見てわかるように食器がすでに並べてあり、ひとしきり映画の世界感を堪能することができた。

4日目の朝、ホストファミリーと別れた後、オックスフォードの街へ向かった。途中ウィンザーの街へ立ち寄った。街の周囲は広大な草原が広がっており、町並みも落ち着いていた。ウィンザー城の中へ入る時間はなかったが、古い街並を散策することができた。この城は王室の所有でエリザベス女王が週末に過ごす公邸で多くの観光客が訪れるそうだ。



ガイドの田中さん(上)から、大学の一つ一つの建物の説明を聞き、生徒達ははじめこそ感心していたが、だんだんこの大学の歴史とスケールの大きさに、途中からあきれてしまったようだった。日本でも田舎である鹿児島という町に住んでいる子供達が、世界の歴史を作ってきた文化の中心地に立った時、いったい何を感じ何を学んだのか非常に興味深かった



8月6日(火)(5日目)



今日の訪問先については、出発前に生徒達が綿密に計画を立てていた。同世代のロンドンっ子のエレノアさんと、ハロッズやホームズ博物館などいろいろな施設を終日見学して回った。しかし楽しむだけでなく、今日は見学する文化施設について事前に各自研究し、ガイドの田中さんやエレノアさんに、逆に英語で選んだ展示物についてプレゼンをしなければならないという課題が与えられていた。



ロンドン滞在中、最後の晚餐である。レストランで食事をするのも毎日のことで、生徒も慣れたもので、店員に英語で話しかけたりしていた。この日も滞在最後ということで、誰が頼んだのか、食後店内で記念撮影をすることになった。快く応じてくれる店員を見ながら、今時の生徒達のコミュニケーション力に感心することだった。

B&S(Brothers & Sisters)プログラムは、今回の全体プログラムの中で生徒達が一番事前準備をした部分である。終日英語を使いながら、地元の大学生と相談しながら自主的にロンドン市内研修を行う。安全のためにガイドの田中さんは同行するが、先生達は同行しない。朝ホテルの前で待っていると、UAL(ロンドン芸術大学)の学生であるエレノアさんが、長い髪を揺らしながら颯爽と現れた。その明るさと気さくな性格に生徒達はいつぱんに気に入ったようだった。



ヴィクトリア&アルバート博物館(通称V&A)は、世界のあらゆる装飾美術が集結した必見の国立博物館である。ここで生徒が展示品について英語でプレゼンを行った際(後で聞いた話だが)、一緒に見て回っていたイギリス人の観光客が足を止めて生徒の説明に感心していたという。その話を聞き、これこそ生きた英語の学習ではないかと思わずにはいられなかった。



8月7日(水)(6日目)



次に訪れたのがバッキンガム宮殿である。ご存じの通りイギリス王室の宮殿で、衛兵交代セレモニーはロンドン観光の最大の目玉である。今回は夏だけ一般公開される宮殿内部に入ることができ、世界の賓客を迎え歓待するステートルームや、レンブラントやルーベンスの絵画などの装飾品も見学することができた。その豪華さにびっくりさせられた。



いよいよロンドン滞在最終日となった。長いようであつという間の1週間であつた。本日最初の訪問地はウェストミンスター寺院！英国国王の戴冠式が執り行われるほか、ウィリアム王子とキャサリン妃のロイヤルウエディングが催されたことでも記憶に新しい。午後の飛行機に乗るためにゆっくり寺院の中を見て回ることはできなかったが、寺院の前で記念撮影をする生徒の姿にも余裕があり、1週間での成長を感じた。



最終日の午後は、バッキンガム宮殿から歩いてセントジェームズ公園を横切り、トラファルガー広場へ移動した。そこで各自お昼を取り、ナショナルギャラリーの見学であつた。広場の噴水の近くに腰掛け、近くのサンドイッチショップで買ったお昼ご飯をほおぼる生徒の姿を見たとき、この1週間で生徒達が経験したことを思い出しながら、短い期間で生徒達が確実に成長したことを実感した。

8月8日(木)(7日目)

飛行機の出発時間ぎりぎりまでロンドンの街を堪能し、帰りも同じルートで韓国を経由し、福岡空港から博多駅を経て川内駅まで帰って来た。

解散間際に、出発の時と同じ場所で記念撮影をした。二つの写真の違いははっきりわからないかもしれないが、目には見えないたくさんの経験や発見を、生徒達はその同じスーツケースの中に詰め込んで帰って来たことを、保護者の方やクラスメートは気づいてくれると確信している。

